

東京音楽大学リポジトリ Tokyo College of Music Repository

## 図書館関係者の為のRDA講習会

著者	鳥海 恵司
雑誌名	ライブラリーレポート
号	1
ページ	45-55
発行年	2013
出版者	東京音楽大学附属図書館
ISSN	2188-4706
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00000935/">http://id.nii.ac.jp/1300/00000935/</a>



# 図書館関係者の為の RDA 講習会

株式会社トッカータ  
鳥海 恵 司

本稿は、2013 年 10 月 5 日開催の「図書館関係者の為の RDA 講習会」（主催：東京音楽大学 付属図書館／共済：株式会社トッカータ）の講演原稿に、加筆修正を加えたものです。

皆さん、こんにちは。トッカータの鳥海です。

今日はこれから、RDA と呼ばれている目録規則について、約 1 時間程度お話しさせていただきます。本日、このような機会を与えていただきました東京音楽大学の稲葉さんには、この場をお借りして御礼を申し上げます。

実は、その稲葉さんから、「カタログの実務に必要な情報に加え、一般の皆さんにも RDA が何かを簡単に分かるような部分も入れてほしい」という難しいご要望をいただきました。そのため、最初に短い導入部分を設けました。ただ、時間の制約上、目録に関する一般的な話としては時系列という観点に留めてあります。

お手元に「RDA による音楽資料の目録作業 ― 資料集」([http://www.tokyo-ondai-lib.jp/library\\_report/rda2013/](http://www.tokyo-ondai-lib.jp/library_report/rda2013/) よりダウンロード可) という 42 ページのプリントアウトがあると思いますが、本日はこの資料集に沿って進めて行きたいと思います。

RDA というのは、資料集の表紙にもあるように、Resource Description & Access の略語で、リソース、つまり図書館の所蔵資料を含む知的・芸術的資源を記述し、その資源にアクセス（接近）すると言った意味であろうと思います。

資料集の 1 ページ目にある表ですが、これは国際図書館連盟 (IFLA) の目録規則関係の主な出版物と、英米目録規則 (AACR) の変遷を年代順に並べたものです。この表から国際的標準化の流れを見ることができます。

AACR は第 1 版が 1967 年に、カタログの皆さんがお使いの第 2 版は 1978 年に出版され、88 年、98 年、2002 年と 3 度の改訂を経て収束しました。この第 2 版の後継として出されたのが RDA です。

AACR 第 2 版の初版のすぐ前に、IFLA から各メディアごとの ISBD が相次いで出版され、AACR 第 2 版も、記述部は ISBD と同じメディア別の章だてになっています。音楽関係では、第 5 章で楽譜、第 6 章に録音物が集中的に扱われています。

一方、2011 年初版の RDA ですが、こちらは 2007 年の ISBD 統合版の構成を採用し、記述の各要素ごとに各メディアの扱い方を並べるという構造になっています。

一方、AACR 第 2 版と RDA の間に現れたのが、目録の理論的な原則を扱った、書誌レコード

の機能要件 (FRBR) と、典拠データの機能要件 (FRAD) という2つの出版物です。

2ページ目の冒頭に、FRBRに掲載されている図を1つだけ載せました。下に簡単なコメントを入れましたが、大雑把な言い方をすれば、Item (個別資料) をサンプルとする Manifestation (体現形) を記述部分が扱い、Work (著作) と Expression (表現) をアクセス・ポイントが扱っていると言えます。

実務では、一番下の Item (個別資料) が直接の目録対象です。ただし、それは大量生産される製造物のコピーの1つで、意識するしないに関わらず、Manifestation (体現形)、つまり1つのコピー製品全体を記述しているわけです。例えば ISBN などは Item (個別資料) ではなく、Manifestation (体現形) に与えられている識別番号です。

次に、AACR 第2版と RDA の構成上の違いを比べてみたいと思います。

AACR 第2版の構造は、先ほども触れましたが、第1部が記述で、図書や楽譜、録音資料などメディアごとに章が割り当てられています。一方、RDA では、第2章にこれらの規則が集中されています。伝統的な記述要素の、表示されているタイトル、版、出版、シリーズなどはすべてこの第2章で扱います。ただし、例外があり、形態的な記述、これを RDA ではキャリアの記述と言いますが、第3章で別に扱っています。また、図書館の所蔵資料だけが対象だった規則では重要視されてこなかった、入手に関する情報も第4章として独立しました。このあたりが図書館から一歩飛び出した、などと言われる部分かも知れません。

さて AACR 第2部、RDA セクション2以降がアクセス・ポイントについての規則ですが、まず単純に、その量の違いに驚かされます。

AACR では、第1部で作った記述に、個人名などの関係するアクセス・ポイントを追加して完成というわけでした。作品のタイトルをコントロールするのは第25章のみで、参照を除けば、あくまで書誌レコードの標目という位置づけでした。

一方、RDA はというと、アクセス・ポイントの最初に登場するのが著作 (Work) と表現 (Expression) で、これは AACR の25章に相当する部分ですが、構成的にもまるで逆さです。これは明らかに FRBR の影響が色濃く出た構成です。

音楽カタログの皆さんは、1つの音楽作品が世界各国の言葉のタイトルで出版されたり、楽譜や録音物など異なるキャリアで発売される資料を日常的に扱っているので、比較的理解しやすいかも知れませんが、著作 (Work)、表現 (Expression)、体現形 (Manifestation) がただ1つ、という世界では統一タイトルなど必要ないので、一般のカタログが理解するためには多少の努力が必要かも知れません。

図書館を利用する目的の多くは、その図書館が所蔵している本や楽譜、CDなどのキャリアに収められている著作や作品を読んだり、聞いたりすることです。その意味で、アクセス・ポイントの最初の部分が作品や表現の同定であるのは、自然な構造とも言えます。

続けて、第3部には、伝統的なアクセス・ポイントである個人や団体が続きますが、ここで目新しいのは家族が著作者の1つとして挙がっていることです。

その次の第4部では、概念、物体、出来事、場所といった、主題目録で扱ってきた項目が並び

ます。ただし、これらのものは、RDA の初版では空白ページになっています。

第5部以降は、これまで見てきたアクセス・ポイント同士の関連性を記録するためのもので、典拠レコード、典拠データベースの存在が大前提のように感じます。このような、アクセス・ポイント自身の属性やアクセス・ポイント間の関係などを記録することを見ると、書誌レコードのアクセス・ポイントは、氷山の一角、つまり典拠標目という典拠レコードに含まれる多角的な情報のほんの一部分のみが顔を出している状態、とすることもできます。

さて、カタログでない方々のための入門編はこれくらいにして、本題の方に移りたいと思います。「RDA を用いた目録作業は AACR 時代と何が違うのか」というのが本日いただいたお題ですが、「実務での」という但し書きがありますので、主に「結果としてこうなる」という形などをお示して、それにコメントするという形で進めさせていただきます。

最初にアクセス・ポイントの問題を取り上げ、次に書誌レコードの記述部分で異なる点を取上げます。いずれも細かな問題ばかりですが、目録の現場で直面する状況を浮き彫りにすることが目的ですので、カタログでない方々には少々退屈な時間かも知れませんが、しばらくの間、お付き合い下さい。

資料集6ページに、アクセス・ポイントに関して14項目ほどピックアップしました。

最初の項目は、略語が綴られた形に変更になった問題です。この変更は RDA 全体に共通するものです。ここでは、編曲、伴奏、団体の部門の3つをあげました。表の左が AACR 時代のアクセス・ポイント、右が RDA になってからのものです。

編曲を表す arr. は綴られた arranged に替わります。次の伴奏を意味する acc. も綴られた形になります。実務という観点から、このような変更にかかる作業量はどの程度になるかという数字も気になります。Toccata の典拠データベースで、arr. は約 6,700 件ほど、acc. の方は 50 件ほどあります。arr. の 6,700 という数は、1日 100 件処理しても2ヶ月以上かかる計算になります。

話がそれますが、2番目の例、ベルクの作品4のタイトル、Lieder, orchestra accompaniment は、別の意味で興味深いので少し補足します。Lieder (ドイツ語) は英語で songs (歌曲) のことで、優先タイトル、つまり統一タイトルですが、その Lieder/Songs には暗示する演奏手段というものがあります。それは独唱とピアノの組み合わせで、この場合だけは、演奏手段そのものを省略します。同じ扱いをするものに、たとえば symphony (交響曲) のオーケストラや管弦楽、choral-prelude (コラル前奏曲) のオルガンなどがあります。ただし、暗示する演奏手段でない場合は書き出すことになっています。このことの実理解には、それぞれの形式が成立してゆく歴史的な知識なども必要で、素人には紛らわしいのですが、この例のベルクの5つの歌曲は独唱とオーケストラという組み合わせで、独唱は暗示する演奏手段なので省略、一方、オーケストラは暗示するものでないの書き出す、この一見アンバランスな表示を補うため、accompaniment (伴奏) という説明語を追加しているのです。

2番目に、個人名の完全形を追加するという問題をあげました。これは RDA に完全移行する

にあたっ、やや混乱が見られた事例でもあります。RDA の規則自体は、他の実体と衝突する場合に、完全形を追加するというものですが、これには衝突に関係なく完全形を追加するという別法があっ、テスト導入段階では別法を採用することになっていました。ところが、資料集にもある通り、今年の本格導入直前の2月に、本則の方を採用すると変更がアナウンスされました。さすがに典拠レコードはこの新しい基準で調整されていますが、書誌レコードにはこのテスト期間のアクセス・ポイントの形が残っているものがあります。資料集の7ページにその例をあげました。書誌レコードをコピーする場合にはご注意を、というわけです。

3番目は、同じ個人名のアクセス・ポイントに、衝突を避ける目的で追加する用語です。AACR 時代は、主に丸かっこに入れる形とコンマに続けるという形を使い分けていましたが、RDA ではすべて丸かっこに入れる形になりました。

4番目は、同じく個人の生没年の形です。ここでも略語を綴られた形にするという変更に加えて、7ページの表にあるような変更が見られます。ただし、議会図書館の共同目録プログラムの方針では、RDA 本体の例示と異なる場合があります、8ページに付録としてその違いを対比しました。

もうひとつ付録として、公共図書館の方もお見えのようなので、日本語アクセス・ポイントへの影響も示してみました。

5番目に、聖書とコーランをあげました。これらは音楽ではありませんが、歌詞、テキストにこれらの部分を用いた作品も少なくありません。件名標目として使われることもあります。変更点は資料集にある通りです。

6番目は、形式やジャンルのタイプの用語からなるタイトルの問題です。AACR の英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語の同義語という条件がなくなりました。英語圏の規則である RDA では、英語のタイトルが増えると予想されます。資料集9ページのベリオの例は、RDA になってイタリア語から英語に変更された典型的なものです。

7番目のチェロの用語の変更ですが、この用語も統一タイトルの演奏手段などに多く現れます。Toccata MARC の典拠ファイルでは、約 1,700 件ほどあります。変更作業は単純な置き換えで済むのですが、次の項目8にある演奏手段の数の制限を撤廃したことの変更と同時に発生することがあります。

8番目です。AACR でずっと守られてきた、演奏手段を原則3以内にするという規定は廃止され、trio, quartet, quintet の室内楽の標準的組み合わせを例外として、個々の楽器をすべて記録することになりました。3以内にするために用いられてきた、例えば woodwinds などその曲で指定されている実際の楽器に切り分ける作業なので、一定の時間がかかり、場合によっては、参考資料などの追加調査が必要になります。



9番目は、集合タイトル Selections です。資料集 10 ページにある通りの変更なのですが、この問題は基本記入の選択に関係することなので、NII などの目録では無関係かも知れません。10 ページに、書誌レコードを1件載せました。この書誌レコードは、同じ作曲者の2つの異なる演奏手段の協奏曲を収めたスコアで、内容作品の表示情報はタグ 505 に、それらのアクセス・ポイントはタグ 700 にあります。そして、このスコア全体のアクセス・ポイントが、タグ 100 とタグ 240 の組み合わせです。11 ページに、1 人の作曲者のコンピレーション（合集）の扱いを簡単にまとめました。また、その下の比較表には、同じ CD のアクセス・ポイントの記録方法の違いを簡単に示してあります。実は右の RDA のタグ 240 は誤りで、演奏手段の orchestra が欠けています。

10 番目は、実務的には重い変更です。AACR 時代、声楽作品のリブレットや歌詞は、音楽作品の統一タイトルの最後の方に追加していました。RDA では、音楽作品と、リブレットや歌詞は、別々の作品として扱うことになりました。11 ページの例は歌劇『オテロ』のリブレットの扱い方を対比しています。その下に、Toccata MARC 典拠レコードを1件載せました。また、資料集の付録として、AACR 2 から RDA へ移行作業中の典拠レコードの画面の変遷を載せました。これらの例は、いわば典拠レコードの大改造で、場合によっては関係するアクセス・ポイントの典拠レコードを新たに作成することがあります。

11 番目も歌詞やリブレットですが、こちらは翻訳など言語の問題です。AACR 時代は、3 以上の言語に polygrot（多数言語）という語を追加し、2つの言語のときは、アンパーサンドでつなげて2つの言語名を追加していました。RDA では、各言語単位にアクセス・ポイントを作ることになりました。2つの言語の場合はともかく、polygrot では書誌レコードの他のパーツをチェックしたり、最悪のケースは楽譜そのものを再チェックしなければなりません。

12 番目は、架空の作家です。これはいわゆるペン・ネームではないので注意しなければならないのですが、音楽ではアメリカの音楽学者のピーター・シックリーが創作した P.D.Q. バッハと俗に呼ばれる架空人物が有名です。RDA では、こうした架空の作家にも市民権が与えられることになりました。

13 番目に、カデンツァを取上げました。ここでいうカデンツァは、協奏曲の楽章の終わる直前に挿入され、ソリストのテクニックを披露する伴奏なしの独奏部分のことです。これまでは、カデンツァの宿主とも言える協奏曲の統一タイトルに追加した形でした。これに対して、RDA ではカデンツァを1つの作品として、カデンツァの作者の下のアクセス・ポイントになりました。

14 番目は、アクセス・ポイント関係の最後になります。いわゆる演奏者アルバムとも呼ばれるコンピレーション、つまり複数の作曲者の作品を収めた合集の扱い方です。AACR 第2版で突然現れた、演奏者を基本記入として選ぶという規則は、RDA では採用されていません。9 番目の Selections と同じように、基本記入制を用いない日本ではあまり関心のないトピックですが、この

変更によって、いわゆるクラシック音楽の分野では、演奏者の基本記入は大幅に減り、そうでないポップスやロック、ジャズといった分野ではあまり変わらないという状況になっています。

演奏者は Expression (表現) レベルの要素です。RDA で基本記入として選択するのは creation (創作) レベルのみです。創作と表現の区別が明確なクラシック音楽の分野と異なり、これらが渾然一体となっていて区別が難しいポップス、ロック、ジャズといった分野では、二次的な創作として扱わざるを得ないということだと思われます。

次に、記述部分での変更点もざっと見て行きます。最初にあげたのは、第1章の3にあるコア・エレメント、基本的な記述要素の一覧です。目録対象のアイテムから読み取れるなら、ここにリスト・アップされているものは全て含めるべきとされています。この一覧で注目されるのは、AACR 第2版で、発行・頒布として1つに括られていた、Production (制作)、Publication (発行・出版)、Distribution (頒布・販売)、Manufacture (製造・印刷)、Copyright (著作権年) がそれぞれ独立した要素となった点です。

この記述での主な変更点をここでは8つほどピックアップしてみました。

1 番目は、AACR 第2版で現れた一般資料表示 (GMD) が廃止され、新しい3つの要素として別々に登場しました。Content (内容)、Media (メディア)、Career (キャリア) の3つです。RDA では6章の9、3章の2と3に用語一覧があります。MARC21 ではタグ 336 からタグ 338 に入力します。Toccatà MARC/B が基本にしている UNIMARC では、残念ながらまだ公式になっていません。これらの要素を含む ISBD エリア・ゼロは 2009 年に追加されたのですが、それを受けて準備中と思われます。

資料集の 15 ページに AACR と RDA の対照を載せました。この例は LC のサイトにある RDA 関連のドキュメントからの孫引きで、スウェーデンのロック・ヴォーカル・グループ ABBA の CD 2 枚組にボーナス DVD がついたアルバムです。AACR の方は見慣れた形ですが、RDA の方は、随分拡張されている印象です。まず、タグ 245 からサブフィールド h [sound recording] がなくなり、タグ 300 の sound が audio に変わり、付属資料扱いだった DVD が別のタグ 300 に格上げされました。CD と DVD それぞれに、タグ 336 content、タグ 337 media、タグ 338 carrier があり、その区別のためサブフィールド 3 という要素を特定するための識別データが付けられています。

資料集の 15 ページから 18 ページに、量が多いのですが、これらのタグ 336 からタグ 338 で用いる用語の一覧を、簡単な日本語を付けて載せました。RDA の日本語版は、いずれ出ると思いますが、それまでの繋ぎとしてお使いいただければと思います。最後に、音楽資料での典型例を 19 ページに載せました。

2 番目に取上げるのは、スコアの用語です。19 ページの下の方から 20 ページにかけて、一覧表で比較してあります。miniture score が study score に入れ替わっています。また、Score の定義が変更され、無伴奏の独奏曲にもこの Score を用いることになりました。実務では扱う量が多いため、遡って修正する場合にはコスト面の問題が出るかも知れません。

また、staff notation（五線譜）であっても、記譜法の種類を注記することが求められています。

3番目の項目ですが、AACR 第2版で登場した楽譜種別の表示が廃止され、版表示と統合しました。あわせて、楽譜の形態に関する要素が責任表示や版表示に分散し、とても紛らわしく判断に迷うことが多々あったのですが、これらを一括して版表示となりました。資料集 21 ページの比較表では、典型的な例を2つあげました。

4番目に、用語の問題を、音楽資料関係を中心いくつか取上げました。見慣れない用語も少なからずありますが、図書を中心とした目録対象が、Web ページなども含めたより広範囲なものが対象となった RDA では、さらに一般化した言葉が選ばれている印象を受けます。もちろん FRBR の影響も見られます。4つ目と5つ目の distinctive（個別的タイトル）と non distinctive（非個別的タイトル）は、AACR の適用細則に由来する用語ですが、次の版である RDA で規則に格上げとなりました。

音楽カタログの皆さんは日々実感されていると思いますが、実は、作品（Work）、表現（Expression）のアクセス・ポイントを構築する場合、問題のタイトルが個別的かそうでないかという判断によって、取扱上で大きな差が出ます。個別的と判断した場合は、別作品のタイトルと衝突しない限り、数や全体と部分の関係など形式上の細かな調整は残りますが、原則として情報源の通り優先タイトルを構築します。反対に、個別的でないと判断されれば、同じタイトルの別作品がなければ単数、あれば複数形にすることから始まり、演奏手段、各種の番号、調とモードなどのさまざまな識別要素を追加しなければなりません。こうなると、音楽辞典や作品目録などの参考資料、場合によっては個人全集などの楽譜のチェックが欠かせません。集合タイトルに至っては、その作曲者が書いた作品の全体像を把握しなければ、タイトルの最初の要素すら決めることができません。

5番目は、再び略語の登場です。今回は記述中の扱いです。情報源の通りに記録するというのが RDA の大原則ですが、略語の場合も同じで、情報源に現れた略語だけはその通りに記録します。

21 ページの下から 22 ページにかけて、AACR で使用した略語が RDA ではどう替わるかの一覧です。（ca. = circa（英語発音：サーカ；おおよそ））（i.e. = id est（ラテン語）英語で that is = すなわち）（S.l. = sine loco（ラテン語）；場所不詳）（s.n.=sine nomine（ラテン語）；名前不詳））

6番目は、誤植などの誤りの訂正方法などです。RDA の説明会では必ず触れるようなので、ご存じの方が多いと思いますが、取上げないわけにも行かないので、簡単な比較表を載せました。その場で訂正する AACR に対して、RDA では誤りのまま記録、正しい形を注記で訂正することになりました。

7番目はその他のものをランダムですが、いくつかピックアップしました。

アクセントやウムラウトなどの記号は、その有無も含め、情報源のまま記録します。大文字の使用



方法、これは情報源のまま記録する方法と、従来と同じに大文字・小文字を使い分ける方法のどちらかを選択できます。

別言語の本タイトル、並列タイトルといいますが、こちらは情報源の範囲が広まりました。

責任表示も情報源の範囲が広まり、数の制限がなくなりました。

次に発行や出版に関する扱いですが、資料集 13 ページから続くコア・エレメントのところで触れた、制作、発行、頒布、印刷、著作権年について、MARC21 には新たな 264 というタグが登場して、この制作、発行などの区別を第2インディケータの値で行うことになりました。当然、これらの区別ごとに 264 がリピートされます。

発行、出版の場所、出版社の名前、出版年なども、情報源のまま記録されます。これらの情報がない場合は、22 ページの上の方にある英語の句をそれぞれ角かっこに入れて補います。AACR では、ラテン語の略語をまとめて 1 つの角かっこに入れていました。

さて、記述に関する問題の最後に、アクセス・ポイントのタイプ、つまり著作 (Work) か、あるいは表現 (Expression) かを区別することができるようになったという、いかにも FRBR の影響下に生まれた規則らしい点を取上げます。アクセス・ポイントを記述で取り上げるのは乱暴と思われるかも知れませんが、このアクセス・ポイントが著作 (Work) に対するものであるとか、表現 (Expression) に対するものであるという説明語句は、アクセス・ポイントそのものではないので、記述的要素を含むと言っても誤りとまでは言えないと思います。

ここでは、典型的な書誌レコードをご覧いただきながら、コメントしてみます。資料集 23 ページから 26 ページにかけて、楽譜と CD が 2 つ、計 3 件の書誌レコードをあげました。

最初はバッハの 55 番のカンタータです。この書誌レコードは OCLC のメンバーが作成し、LC がコピー・カタログを行ったということが、タグ 035 とタグ 042 から分かります。RDA 関係のタグと要素は反転して強調しました。タグ 040 のサブフィールド e に rda とあるので、このレコードは RDA によっていることが分かります。基本記入はタグ 100 のバッハ、典拠形アクセス・ポイント、つまり作品の統一タイトルはタグ 240 で、これは著作 (Work) に対するアクセス・ポイントです。ここで、このページの下から 3 番目のタグ 546 に注目です。この注記から、歌詞はドイツ語で、すぐ下に英語の訳がついていることが分かります。つまり、歌詞は英語とドイツ語です。参考のために、AACR 時代の統一タイトルを、次のページのこのレコードの最後に網掛けで追加しました。AACR 時代は、この統一タイトル 1 つで済んでいました。ところが RDA になって、この形は Expression (表現) レベルのタイトルになり、前の 3 の 11 で触れた言語副標目での扱いの変更も関係し、この情報を追加したものがレコード最後の 2 つのタグ 700 となります。これらのアクセス・ポイントが表現レベルであることをはっきり示すため、それぞれの末尾にサブフィールド i で説明語を追加しています。この第2インディケータが「2」のタグ 700 は既存のもので、分出・副出記入の標目として使われています。

なお、これまで触れませんでした、個人や団体などの作品や表現との関係や役割を示すために、サブフィールド 4 のコードではなく、サブフィールド e の用語の方を使用することが推奨されています。

2番目の例は、ブルッフとドヴォルザークのヴァイオリン協奏曲の演奏を収めたCDです。このCDは複数の作曲者の作品を収めたコンピレーション・アルバムですが、演奏者は Expression (表現) レベル、つまり二次的創作ではなく単なる演奏表現なので、基本記入の creator にはなりません。演奏者の表示はタグ 511 に注記され、収録作品の表示は、これはCDのラベルや容器などに表示されている形で、タグ 505 の内容細目に書かれています。これらのアクセス・ポイントは25 ページにあります。先ほどの楽譜の例と同じ手法で、ただし説明語句は冒頭にあります。内容作品の作曲者と典拠形アクセス・ポイントの組み合わせがタグ 700 に入っています。

最後の例は、プッチーニの『ラ・ボエーム』のCDで、ラジオ放送された録音のCD化です。話は少しそれますが、このことを検索できるように、タグ 655 で (次の25 ページの上の方にあります) ジャンル・形式標目を与えています。

この例で注目は、25 ページの下よりにあるタグ 500 の網掛け部分、リブレットの原作がアンリ・ミュルジェの『ボヘミアン生活の情景』(これはトッカータの典拠レコードでの日本語タイトルです) というような意味の注記ですが、そのことのアクセス・ポイントが次のページのタグ 700 の最後に、やはり説明を伴って付けられています。リブレットの関連著作なので、レベルは著作 (Work) となります。

さて、これまでは主に書誌レコードでの問題を扱ってきました。資料集の2ページから5ページにわたる RDA の構成で、3ページ目のセクション3以降は各種アクセス・ポイントの属性やアクセス・ポイント間の関連性を扱っています。これらは典拠レコード、典拠データベースの存在が前提となっているというお話をしました。

ここから先は、その典拠レコードでは、それらの属性や関連性をどのような方法で実装しているかを見ます。

資料集 26 ページから 27 ページにかけて、MARC21 と Toccata MARC/A の対比という形で、これら属性や他のアクセス・ポイントとの関係を示すフィールドの一覧を載せました。MARC21 では、RDA の適用に備えて、これらのフィールドを新たに追加しました。Toccata MARC/A の方は、当初から存在するタグ C25、作品番号やタグ C61 の年代などはそのまま継続しています。UNIMARC/A にならって RDA 以前に追加したタグ 120 の個人の性別コードで代用したり、そのほかは新規に追加したりと、ややバラバラの対応ですが、ほぼ MARC21 と同じ項目を持っています。まだ準備中のものもいくつかあります。これらを1つずつ説明している時間はないので、ここでも実例をもとにコメントしたいと思います。

例の1は、マーラーの第1番の交響曲の典拠レコードです。a は MARC21 の LC のもの、b は Toccata MARC/A です。

Toccata MARC/A は、1989 年に UNIMARC/A が世に出る6年前の1983年に開発されたフォーマットです。ISO-2709 や、出たばかりの UNIMARC の初版、LC の典拠レコード・フォーマットの予備版などを参考に、大学・研究機関向けのラテン文字標目と、公共図書館向けの日本語文

字標目を1つのレコードで実現させるという、日本の特殊事情も加えた独自フォーマットです。データ・フィールドの1桁目と3桁目にアルファベットを用いています。

LCの典拠レコードですが、タグ046は典拠標目の年代です。データはタグ670のgrove onlineからとられています。典拠標目は作曲者＋タイトルの形でタグ100に収められています。このタグ100は個人名のアクセス・ポイントと定義されていますので、タイトルが追加された個人名標目の一種という位置づけです。なお、LCではRDAへの再コーディングに際して、そのレコードにある情報の範囲でRDAタグへの対応を行うこと、そのための新たな調査は行わないことなどを表明しているので、RDAに切り替わったと言っても、それぞれのレコードによってRDAタグの情報量に差があります。

タグ380は作品の形式、タグ382は演奏手段、タグ383は番号、タグ384は調というように、作品の属性やプロフィールが書かれています。

Toccatà MARC/Aですが、こちらの典拠レコードでは実体単位にレコードを作成している関係で、作曲者のアクセス・ポイントは直接は書かれていません。タグ002にそのIDを入れて、リンクを形成する形になっています。タグ002の反転部分が作曲者マラーの典拠IDです。コロンの降はソフトウェアが生成する、確認用の表示情報です。

作品そのものの典拠形アクセス・ポイントは、タグA5A/A5Kにあります。3桁目のAはラテン文字、Kは日本語の漢字・カナ・データです。サブフィールドwの中間あたりにある反転文字dはRDAを示しています。タグC20からC28までがRDAデータです。C61は年代で、厳密な意味でのRDA項目ではありませんが、ほぼ互換性は確保されています。

例2は、中世の作曲家デュファイのレコードです。LCの典拠レコードでは、タグ100が典拠標目です。サブフィールドdが、RDAの議会図書館の共同目録プログラムによる形式です。これは資料集3の4のところでお話しました。タグ370は関係場所、この例では出生と死没の場所です。タグ374が職業、タグ375は性別です。タグ400はいわゆる参照標目で、サブフィールドwの3文字目の薄い反転のeは旧標目であることを示しています。この旧標目によって検索の継続性を担保しています。

続けてToccatà MARC/Aですが、タグ番号は違っても、ほぼ同じ機能のフィールドが存在します。

本日のお話も終わりに近づいてきました。Toccatà MARC 書誌が準拠しているUNIMARC/BのFRBRや、RDAを受けた動きを述べたいと思います。

UNIMARC/Bですが、資料集30ページにあるように、Work(著作)とExpression(表現)のために4つのフィールドを新たに追加しました。

タグ506/507がタイトル単独の優先アクセス・ポイント、タグ576/577が著作者と優先アクセス・ポイントの組み合わせで、著作者＋タイトル形の標目です。それぞれ3桁目が6の方は著作(Work)レベル、7が表現(Expression)レベルです。既存のフィールドに説明語句、サブフィールドiを追加して区別しようとするMARC21と対照的な対応です。資料集30ページにあるそれぞれの例示は、これらのマニュアル・ページにあるものですが、LC/OCLCによるRDAのもとで

の目録とは目指す方向が異なっているようです。

なお、MARC21 のタグ 336 からタグ 338 に相当するデータ項目は、先ほども触れましたが検討中で、フランスなど一部のメンバーからタグ 181-182、203 などが提案されているとのこと。なお、UNIMARC の新しいフィールドと ISBD のエリア 0 は、IFLA のサイトから PDF でのダウンロードが可能です。

最後に、RDA や FRBR の要素を部分的に反映した Toccata MARC/B のレコードの詳細を載せました。最初の例は、吹奏楽コンクールの課題曲の模範演奏を収めたコンピレーション CD、2 番目はスティーヴ・ライヒの作品の楽譜です。

UNIMARC の RDA 対応がこれからの段階なので、実験的に追加したタグも含めて反転で示した RDA データは僅かです。

最初の CD ですが、AACR 時代に演奏者が基本記入となっていたのが (UNIMARC ではタグ 700 個人、タグ 710 団体に入力します)、そうではなくなっている点が構造的な大きな違いです。CD には 5 曲の演奏が収録されています。各作品は階層リンク手法を用いて、タグ 464 に記述とアクセス・ポイントをペアで収めています。これらのデータ項目は、サブフィールド 1 という特別な識別子を用いて、その中にタグとデータの組み合わせを埋め込むという、入れ子構造になっています。このレコードでは、アクセス・ポイントは全て典拠レコードにリンクしています。

レコードの最後の方、タグ 801 のサブフィールド g に rda による目録であることを記録し、部分的適用であるので、タグ 830 のカタログ用注記に MARC21 のタグ 336-338 に該当するデータをまとめてメモしています。

2 つ目の例のスコアでは、RDA の記述データを日本語にするささやかな試みをしました。タグ 215 とタグ 302 の反転部分がその部分です。

資料集の最後に、web から無料でダウンロードできる RDA 関係の文書を中心に、参考文献表を付けました。また、付録として、オペラのリブレットの典拠レコードを AACR から RDA に変更する過程の編集画面を付けました。RDA に移行する際に起きる実務上の手間、コストの予測に役立てていただければと思います。

長時間のご清聴、ありがとうございました。